

ヴェルニーと横須賀造船所

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	45
号	2
ページ	57-111
発行年	1998-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/6117

ヴェルニーと横須賀造船所

宮 永 孝

神奈川県三浦半島の中央部に、

「横須賀」

という、人口約三十六万の市まがある。

横須賀は江戸末期、戸数三十あまりの小さな漁村だった。

慶応元（一八六五）年幕府はこの地に洋式造船所を創設し、明治四（一八七一）年ごろ、それがほぼ完成した。

やがてこの町は、明治六、七年ごろになると、戸数がさらにふえ、千有余までになった（『横須賀港独案内』明治二十一年刊）。

同十（一八七七）年横須賀は軍港に指定され、十七（一八八四）年には海軍鎮守府がおかれた。

その後、横須賀は「軍艦旗」と「軍艦マーチ」に象徴される日本海軍屈指の軍事都市として発展をとげて行った。が、太平洋戦争でわが国が敗北したのち、米軍の占領するところとなった。とくに港と旧日本海軍の施設は、当初アメリカ海軍が用い、のち海上自衛隊と共同で使用するようになり、こんにちにいたっている。

わが国初の洋式造船所は、幕府がオランダの技師たちの指導をうけて、安政四（一八五七）年に着工し、文久元（一八六二）年に完成した、長崎飽の浦の、

「製鉄所」

をもって嚆矢とし、横須賀のものは二番手ということになる。

幕末、造船所のことを「製鉄所」とよぶのが一般的であった。

幕府の財政が極度にひっ迫していた当時、勘定奉行小栗上野介（一八二七〜六八）をはじめとする幕閣の有司が、机上の計画におわらせることなく、造船所建設に踏みきったことは一大壮舉であり、その勇断は大いにたたえられてよい。

結果において、フランスのツーロン軍港の三分の二の規模のものができあがった。経費二四〇万ドルの一部は、わが国の銅をもって支払われ、また一〇〇万ドル相当は生糸を担保としてフランスから借りた。

維新後、新政府はその未払い金四二万ドルがあることを知り、大いにあわてた。

横須賀に製鉄所をつくることを立案し、その建設を推進した最大の功労者は、勘定奉行小栗上野介であるが、設計から人事、工事のすべてをつかさどり、大きな功績をあげたのは、フランスの海軍技師、

——フランソワ・レオンス・ヴェルニー（一八三七〜一九〇八）であった。

この二人の胸像が、こんにち横須賀市の臨海公園のなかにあるのは、その功績をたたえ、ながくそれを記念するためである。

毎年、十二月末に駐日フランス大使や関係者らがあつまり、式典がもよおされているという。さて、ヴェルニーのことである。

このフランス人の人と業績については、お雇い外国人や日仏関係について研究しているわが国の史家によって、ある程度まで究められている。が、研究はまだその緒についたばかりで、本格的な研究があらわれるまで、いまずこし時を要することだろう。

フランスにある一次資料（肉筆）の判読が容易ではなく、語学のかべが研究の進捗をはばんでいるともいえる。

ヴェルニーの子孫にとって、日本に十年余り滞在し、その近代化の一翼をになった「レオンス」は、一族の誇りでもあるようだ。

その人と功績を後世に伝えるためにまとめたのが、『フランソワ・レオンス・ヴェルニー』（一九九〇年刊、ルフラン印刷会社、私家本¹）である。

同書は、ベルニー伝編さん委員会の委員長ジョルジュ・バライ氏によって著されたものであり、三部十九章——二六六ページからなる。子孫宅にのこる資料、フランス海軍歴史資料館や理工科学校その他の記録をもとに書きつづったのがこの本である。

主としてフランス側の材料によって書きあげたもので、日本側の資料はほとんど利用されなかったようだ。たとえばわが国には、勝海舟の『海軍歴史』（講談社、昭和49）、『横須賀海軍船廠史』（横須賀海軍工廠編、大正4）、柴田日向守の日記「仏英行」（『西洋見聞集』所収、岩波書店、昭和49）、「柴田日向守英仏行御用留」（稿本、東大史料編さん所蔵、状態わるくいまは閲読不許可）、「横須賀製鉄所一件」（『統通信全覧』所収、雄松堂出版、昭和61）など、なかなか捨てがたい文献や資料がある。が、これらを参考にできなかったようにおもえる。

わたしがヴェルニーに関心をもつようになったのは、横須賀製鉄所建設のために、技術者の雇い入れ、機械類の購入、三兵伝習の教官を招へいする用務をおびて、慶応元（一八六五）年閏五月に渡欧した、外国奉行柴田日向守の日

載（「仏英行」）を精読するようになってからである。

とくにヴェルニーその人や幕末の日仏関係に関する一次資料はかなりあつめたが、いまだそのすべてに目を通し、判読するにいたっていない。

本稿は、わが国であまりよく知られていないヴェルニーの生いたちから晩年までを、横須賀製鉄所建設とのかかわりにおいて素描したものである。

先にのべたジュールジュ・バライ氏の著述『フランソワ・レオン・ヴェルニー』に多くを負うてはいるが、フランスにおいて収集した一次資料もてきぎ利用してある。とくにフランスにおける柴田日向守一行については、前掲書において簡単にふれられているにすぎない。柴田の日載「仏英行」に接しないかぎり、一行の動向をはあくすることはむずかしいといえる。

*

マルセーユを午前九時ごろに発ったT・G・V・（高速列車）は、十一時ごろヴァランス（フランス南東部、ドローム県の県都）につく。

マルセーユとヴァランス間の風景は、それほど魅力あるものではない。汽車はマルセーユ市街を抜けると、進行方向の左手に、地中海の灰色の海がしばらくみえる。

貨物船が碇泊している光景をしばらく見て、二十分ほどたつと、新興の住宅群、工場とその倉庫、石油コンビナート、などがみえだす。

さらに北上をつづけると、広々とした平野に入る。右手には丘がつづき、緑の木立や畑などがみえてくる。

列車は、ときどき林のなかに入る。それを抜けると、また平野がひらける。赤い屋根の農家が、ここかしこにみえ

る。畑はほとんど麦畑なのだが、ほとんどだいだい色をしている。ヒマワリ畑もある。

遠くに山なみを見、川をなんとか渡った。進行方向の左右に、畑と森林がしばらくつづく。十時すぎ古都アビニオンを通過した。

やがて左手に、灰青色のゆるやかに流れるローヌ川がみえてきた。河岸に人家が点在し、その後背地は、白いけけと緑の丘陵がっつらなっている。

列車は、ヴァランスに着いた。

この町は、パリの南東五五八キロにある。ローマ人がつくった古い町で、古くはフェンティアと呼ばれ、のちファレンティアと呼称された。こんにちの人口は、三万七千ほどである。

ヴァランスは、小さななか町である。街はローヌ川の河岸段丘のうえにある。旧市街には、十一世紀に創建されたというロマネスク様式の大聖堂がある。郊外には、古代ローマの農地の遺構もあるらしい。

いまは農産物の取引の中心となっている。中央山岳地帯のいなか町オブナへむかうバスが出るまで二時間ほど間があったので、街のなかを見物し、昼食をとることにした。

市街はひっそりとし、人影もうすい。街路をぬけ、町はずれに出た。絶壁が屹立した山並がみえる。そのところどころに白い岩はだかのぞいている。

しばらくその山岳風景を見入ったのち、駅にひきかえし、駅の食堂で腹ごしらえをした。

バスは、午後一時十五分にでた。バスは町をぬけると、ローヌ川にそってしばらく走る。右手に白い岩はだの丘陵がみえ、プラタナスの並木道を南にくだってゆく。

車窓に人家、農家などをみる。やがてバスは、山間の道をゆっくりとのぼりはじめた。のぼりきると、見わたすか

ぎり、起伏に富んだ山なみがみえる。

バスはくねくねした山道をのぼったり、下ったりして進んでゆく。ときどき一人ふたりと乗客をおろしたり、ひろったりする。一時間四十五分のバスの旅をおえたころ、山上のいなか町、

「オブナ」に着いた。

この町は、ほとんどわが国では知られていない。いまの人口は、一万数千ほどである。かつては絹織物がさかんであったが、いまはとくにこれといった産業はなく、農作物やジャムの生産地として知られている程度である。

町のなかには、とくにきわだった建物はない。十三世紀から十六世紀にかけて造られた城（「オブナ城」）とサン・ローラン小教区教会などが唯一、おもな建物といえようか。

城はいま町役場として使われている。オブナの古地図をみると、この町は扇をひろげたような形をしている。

町の周辺を通りが取りかこんでいる。町の西側にあるエーレット広場から、眼下を見おろすと、すばらしい景色がみられる。

遠くに起伏した山々がみられ、川がゆったりと流れている。ところどころに赤い屋根の家が、ちらほらみえる。北の方角に目を転じると、西から東にアルデッシュ川がゆっくりと流れている。そこにかかっているのは、「オブナ橋」^{（オブナ橋）}（ユセル橋ともいう）である。

目ざすヴェルニの旧宅と墓碑をさがし出すまで、手間がかかった。まず町役場をたずね、係員から出生と死亡証書を手に入れたのち、そこに記載されている内容についてたずねる。とくに広報課の職員からいろいろ教示をうるこ

とができた。

オブナの町がある山をくだり、アルデッシュ川にかかるオブナ橋までゆき、そこから来た道をオブナの町へむかっ

てひきかえした。その途中で、老人をつかまえ、

ヴェルニーの家を知りませんか、とたずねた。

——ああ、知っているよ。すぐその大きな家だ。

といった答が返ってきた。

が、わたしには相手がいったことばがよく聴きとれなかった。

老人がいった「大きな家^{グランド・ハウス}」とは、どの家を指すのか。しばらく、あたりをうろろうした。

J・マトン通りとし・ヴェルニー通り（ヴェルニーの名前をとってつけた通りの名か）交わる角地あたりに、大きな木が茂った家があり、ちょうどその門から中年の女性が出てきた。

その女性をつかまえ、ヴェルニーの家をさがしているが、ご存知ないか、ときいたら、

——ここがその家です。わたしはときどきこの家の世話をしに来るのです。といった。

このときは敷地のなかには入れなかった。が、門の外から中をのぞいたり、外側から建物全体をながめたりした。ヴェルニーの家は、石がきにかこまれた、白亜の三階建の大きな家である。ツゲの樹が何本かおい茂り、そのゆたかな葉は建物の三方をとりかこんでいる。

建物の窓には開き戸がいくつも付いており、屋根からは小さな煙突が何本も天にむかって突きでている。

ヴェルニーが晩年、家族とともにくらし、息を引きとった家は、これでわかった。が、つぎに知リたかったのは、かれの墓碑である。

墓のほうは、かれの家の裏手から数分のところに共同墓地があり、そのなかに一族の者のそれといっしょにあった。

墓地の入口を入れてすぐ右手に、ローマ十字標がついた墓碑（写真参照）があるが、その下にヴェルニーは眠っている。石の刻字は、いまはほとんど読めなくなっている。

*

フランソワ・レオンス・ヴェルニーが生まれた家は、十六世紀にさかのぼる旧家である。代々あたまでの良い家系であつたようで、すぐれた人物を輩出した。

ヴェルニーは一八三七年十二月二日にアルデッシュ県オブナ町のサント・アンヌ街で生まれた。父の名は、マテュー・アメデ・ヴェルニー（一八一〇～七三三）、母はアンヌ・マリー・テレズ・ブランシュといつた。

ヴェルニーの父は製紙工場を経営する実業家であり、母はアノナの町（アルデッシュ県ブリヴァの北約七〇キロ）の郵便局長の娘であつた。

ヴェルニーの両親は、一八三四年一月十日に結婚式をあげると、つきつきと子どもをもうけ、七人の子宝にめぐまれた。

長男アルチュール（一八三四～九二）

次男アレックス（一八三五～一九〇〇）

三男レオンス（一八三七～一九〇八、日本にきたヴェルニー）

四男ジョルジュ（一八四〇～一八六五）

五男ポール（一八四二～一八六九）

長女イザベル（一八四五～一九一〇）

次女クレマンヌ（一八四七～一九四二）

オプナの町役場にあるヴェルニーの出生証明書によると、生まれたとき、父は二十五歳であり、母は二十四歳であった。

ヴェルニーが生まれたサント・アンヌ街は、石だたみの小路の両側に、家がくしの歯のように建ちならんだようなところである。かならずしも住環境はよいとはいえなかった。のち父は、近所のものの目が光っている暮らしないや気がさし、山上の町をのがれ、オプナ橋のちかくに引越し、じぶんの製紙工場のそばに家をもうけた。

少年時代のヴェルニーは、きびしさの中にもやさしさが宿っている母の慈愛のなかで育った。母は厳格主義を地でゆくような女性であった。

修学年齢に達すると、司教区の神父が経営するオプナの町のコレージュにかよった。八歳から十一歳までのこの学校にまなぶのであるが、寄宿生であったのか、それとも通学生であったものか、定かでない。

コレージュにおける少年ヴェルニーは、けっして勉強に熱心であったわけではない。行儀はとくに申し分はなかったが、ただ成績のほうはかならずしもよいとはいえず、はじめのうちはふつうのできであり、通信簿にはいつも「^{ビアン}ふつう」または「^{バザール}可」とついていた。

やがてリセ（高校）をめざし、家庭教師について勉学に精をだすようになると、成績が向上して行った。

ヴェルニーが進みたいとおもったのは、リヨンにある国立の三年制の高校「リセ・アンペリアル」である。

かれがこのリセで学んだのは、一八五三年から五六年までの三カ年、十六歳から十九歳までである。このときは寄宿生であった。九月にリセの宿舍と学校とをかよう暮らしがはじまると、想いだされるのは故郷オプナでの何不自由のない生活と肉親のぬくもりである。オプナのコレージュとは異なり、リセの生徒となると学業もなかなかたいへんである。

かれを待ちうけていたのは、灰色の檻かぎのなかのような生活であった。冷厳な教師に学課をみっちりこまれる。リヨンの名だたる受験校だけに勉強に追われたことであらう。

けれど時には故郷の母から手紙や食糧などが届けられ、また時おり親戚のおじが外に連れだしてくれたり、食事と呼んでくれたりした。

秋から冬にかけて、暗い日々がつづく。そればかりか日増しに寒くなってくる。けれど健康状態はよく、カゼをひくことはあまりなかった。

ただ視力が弱いのが玉にきずであり、すでにひどい近視であった。当時、リセアンとしてのヴェルニーは、どのような風体をし、学業成績のほうはどうであったのであろうか。かれはいつもやや大きな目の上着とズボンを身につけ、オーバーを着ていた。

余暇にはヴァイオリンを習い、十二月の期末テストでは数学で二番といった成績をおさめた。入学した翌年には数学で一番となったが、化学でしくじり成績がふるわなかった。

数学の補習をうけるほか、物理・化学の勉強に精をだし、リセの最終学年には、父のゆるしを得て、日曜日の朝、乗馬をならった。

やがてリセ・アンペリアルアンペリアルの三カ年間は、またたく間にすぎ、一八五六年かねての志望どおり、パリにある理工科エコールポリテ学校を受験し、さいわい入学することができた。

入学者一一五名ちゅう六四番という成績であった。理工科学校はグランゼコールのひとつである。そこに入学できることは、ひじょうな名譽とされる学校である。卒業生の多くは、技術将校になるか、実業界に入り、やがて指導的地位につくのがふつうであった。

理工科学校は一七九四年に創設された寄宿学校である。はじめのうちは、学費はいらなかった。それまでパレレ・ブルボンにあったこの学校は、一八〇五年にパンテオンのちかくに移転し、一九七一年までいまの地にあった。が、この年にパリ近郊エソンヌのパレソーにふたたび移り、現在にいたっている。

当然のことながら、理工科学校では科学を中心とする授業を重視し、とくに数学教育に力をいれた。生徒は制服を着、休暇のときは許可をえて外出した。

一八一五年、それまで学費が不要であった同校は、有料となり、生徒は年に二千フランおさめねばならなくなった。学校の課業はきびしく、毎年選抜試験によって新入生が入学した。

理工科学校は、国家有為の人材を養成する機関であったが、自由主義の伝統をうけついでおり、“光栄の三日間”(一八三〇年の七月革命のときの三日間)のお祭さわぎのときは、生徒たちは積極的に参加した。

ヴェルニーは、この学校の寄宿生として、どのような生活を送ったものか、この点になると、あまりよくわかっていない。が、当時の本人の風貌をつたえるものや成績については、陸軍省に記録が残っている。⁽³⁾

エコール・アンペリアル・ポリテクニク

学生ヴェルニー(フランソワ、レオンス)の身体的特徴およびメモ

アルデルシュ県のオブナにおいて、一八三七年十二月二日生まれる。

人相

身長……………一メートル七三八ミリメートル

頭髪および眉毛……………くり色

額……………ふつう

鼻……………ふつう
 目……………青色
 口……………ふつう
 あご……………丸い
 顔つき……………卵形

また成績はつぎのようになっている。

「学年末の総合成績の通知表」

【科目名】	【満点】	【生徒の取得点数】
解析学	一、〇八〇	七九三・四〇
機械学	一、三〇〇	一、〇三四
物理学	九〇〇	五六四・二〇
化学	九〇〇	六六八・三五
截石法 <small>せつせきほう</small> （石などを切断する技術）	一、〇〇〇	六六八・三五
建築学	七〇〇	五七〇
戦術および地形図	五二〇	四三八・九〇
フランス文学	二四〇	一七一
ドイツ語	二四〇	一五九
デッサン	二四〇	一七一・四八

品行……とてもよい

身なり……良

計一〇、四八〇

七、七八五・三〇

一八五八年九月三十日 パリ

理工科学校 総司令官

署名

この成績表は、理工科学校を卒業するときのものである。成績のほうは、おおむね良好であったことがわかる。パリにおけるヴェルニーの私生活については、わからぬことが多い。学校ではしぜん熱心にまなぶ者とそうでない者とは分けられるが、授業の合い間に学友同士いろいろな話題について語りあい、おしゃべりをたのしむのだが、気晴しや娯楽には乏しかった。

日曜日など、たまに友人や親類の者と会うのがたのしみであったろうか。最終学年になった一八五七年春のある日曜日のこと、ヴェルニーはパリで軍務についている同郷の友人オーギュスト・リヴィエールと再会した。ふたりは学校の近くにあるカフェのいすに腰をおろすと、サンドウィッチを食べながらよも山の話をした。

理工科学校で三カ年学ぶあいだに、ヴェルニーは一人前のおとなになってゆく。当然のことながら性格や考えや物の見方にも、少年のときとは異なる点がみられるようになっていた。

かれは歳をとるにつれて、皮肉ぼくなり、奇抜な趣向や反論をこのむ性癖が目につくようになった。性格はまっすぐであり、つつましく、意志は強固であった。

体は大きく、長身であったため、すこし猫背にみられた。顔つきは、きびしかった。体はじょうぶであったが、近

視だけが問題であり、目がわるいためによく頭痛がおこった。

理工科学校を無事に卒業したヴェルニーが、つぎに進んだのは海軍造船工学学校である。

一八五七年以来、この学校はパリにあり、ヴェルニーは海軍技手として、一八五八年から六〇年まで二カ年、ここですごした。

ヴェルニーがこの学校に入学したところ、帆船から鉄の船にかわる過渡期にあった。

帆船よりも蒸気船がいちだんとすぐれていることが認識されるようになっていた。海軍では、どんな天候でも航行できる蒸気船を重要視するようになり、とりあえず引き船・護衛艦・砲艦などに蒸気機関をもちいるようになった。

一八五〇年五月、ツーロンにおいて、進水したナポレオン号（五二〇〇トン、備砲九〇門）は、新しい船の時代の到来を告げるかのように、帆と蒸気を動力とする新造艦であった。

ともあれフランス海軍の近代化に功績があったのは、海軍技師のアンリ・デュブユイ・ド・ロム（一八一六—一八五）である。かれはフランス最初のスクリュー蒸気船および装甲艦などの建造につくした。ヴェルニーが海軍造船工学校に入学した当時、ロムは同校の校長であった。

ヴェルニーがこの学校でどのような教科を教わり、またかれは、どのような学生生活を送ったものかわからぬことが多い。

この時期のヴェルニーの生活の一端を明かすものとして、手帳が残されており、それには旅行や出費や知人のことなどが記されているらしい。

入学した一八五八年の夏、ヴェルニーはフランスの西部と南部を旅行している。それは私的なものであったのか、それとも公的なものであったのか不明である。

いずれにせよ一八五八年の八月末、かれは旅立った。最初におとずれたのは、オルレアン（フランス中北部、パリの南南西一一六キロ）である。この古都では十七世紀のゴシック式の大聖堂を見、ついでトゥールやボルドーをおとずれた。

ブドウ酒の輸出港として有名なボルドーでは、鋳物工場をおとずれ、そこでロシアの海軍士官と知りあいになると、いっしょに食事をしたり、芝居を見にでかけた。

ボルドーの街でみかけた女性らにも目をむけ、彼女たちの特徴をしるしている。

——ボルドーの女性は、きれいである。額は中高である。鼻はワシのように曲がっている。あごはとがっており、利発な表情をしている。

それよりかれは、トゥールにおもむき、ついでボルドーにもどり、それよりトゥールーズ（フランス南部）を経て故郷のオブナにもどった。

古都トゥールーズ（パリの南南西六八一キロ）では鋳物工場をおとずれ、ついでニーム（フランス南部）まで足をのばした。

一八五九年四月初旬、こんどは北フランスのル・アーブル（フランス中西部）やオンフルールに旅行した。かれはル・アーブルに住むいとこの家に食事に招かれたのち、港に碇泊中の護衛艦や砲艦などを見学した。

同年六月、こんどはイタリアに旅行し、ジェノヴァやリボルノをおとずれた。イタリア独立戦争のときはツローンにおり、約千百名ほどのフランス兵とともにジェノヴァに入港したとき、ようやくほっとした気分になった。に難儀をしのいだ。が、船でいっばいのジェノヴァに入港したとき、ようやくほっとした気分になった。

ヴェルニーは、ジェノヴァからリボルノ、ピサ、フィレンツェまで足をのばしているが、これは単なる私的な旅行

であったものか。ともかくかれはこの時期、眼炎をわずらっており、その治療と休養をかねて一時オプナに帰省している。

一八六〇年六月、休暇の延長を願いで、四十五日間の延期を許可されている。いずれにせよかれは同年、無事に海軍造船工学校を卒業することができた。

一八六〇年八月、ヴェルニーはプレスト（フランス北西部の軍港）に着任した。かれにあたえられた仕事はじつに多岐にわたっており、造船・製鉄・製材・木工・蒸気機関・艦船の修理など、各部門をひとわたり速修した。

翌一八六一年には、見習水夫の学校設置、会計および納品受理のしごとなどにたずさわった。プレストの海軍工廠に勤務したのは、約一カ年ほどである。

*

一八六〇年十月、英仏連合軍は北京を占領したのにつづいて円明園を焼き、清国はフランスと天津条約の批准を交換した。翌年十二月には天津や広東にアメリカ、フランスの租界がもうけられた。

折から太平軍が各地で官軍や英仏軍やウオードがひきいる常勝軍と戦闘をつづけており、翌一八六一年十月英仏軍は寧波^{ニンポ}を占領した。各町を砲撃したり、軍隊を支援するためにも、海軍の砲艦は不可欠であった。

しかし、フランス軍には艦の手入れや、修理したりするドックがなかった。フランスはとりあえず小型の砲艦を四隻建造することに決し、造船技師と現場監督を清国に派遣せねばならなくなった。

その人選をまかされたのは、アンリ・デュプイ・ド・ロムであり、かれはヴェルニーに清国へ行く気はないか、とたずねた。

ヴェルニーは、両親とも相談せねばなりません、といって返事を留保した。

が、上司が白羽の矢を立てたことに気をよくしたヴェルニーは、両親を説得し、その承諾をえると、清国行を了承した。

アンリ・デュブイ・ド・ロムは、ヴェルニーから肯定の返事をえると、ジョレス提督の指揮下に入ることを命じ、また砲艦四隻の建造計画にたいしても許可をあたえた。

一八六二年九月六日、新たに建造される砲艦の名は、海軍大臣フランソワ・ド・シャス・ループリーロバ（一八〇五〜七三）の名で、つぎのように命名するよう清国に駐留する海軍少将に命達された。

ブルデ

ケネイ

アヴァンチュール

エグレット

同年九月十三日、海軍大臣は上海における四隻の砲艦の建造監督をヴェルニーに委託することにし、十月十九日までマルセーユにおもむき乗船するよう命じた。

ヴェルニーは出発日まで、ブレストにおいて砲艦「ラ・トルマント」号の修理と装備のしごとを片づけ、そのあとオブナにもどると、清国に赴任するまで、故郷でのんびりとくつろいだ。

やがてマルセーユにおもむくと、そこで四名の仲間とともに「ラ・ネヴァ」号に乗船した。

一行五名は、この船でアレキサンドリアまで行き、そこで下船し、陸路スエズに出、そこからアンペラトリス号に乗りかえ、香港を経て上海に出、そこで船をおりることになっていた。

ジョレス提督（海軍准将）は、折からシンガポールにいたのであるが、フォコン指令官に至急報をもってヴェルニの赴任をつたえ、小官がもどるまで造船所建設に必要な用地や建艦の資材についての報告書を作成しておくように命じた。

当時、フランス領事館は上海と寧波にあり、ド・モンティニイが領事職にあった。

上海に着いたヴェルニ以下四名は、ほどなく寧波にむかった。

寧波は浙江省北東部の町である。甬江の下流に位置している。ヴェルニたちがここに着いたとき、街は戦火のため廃墟同然であった。けれど一八六二年七月清仏軍が太平軍を打ちやぶったあと、町に平和がもどり、フランス艦が警備についていた。

ヴェルニは予想外のことだが、寧波の副領事に任命された。かれはフランス海軍に対して造船所をつくるための用具一式と資材の調達をもとめ、翌一八六三年初頭には、住居・作業場・倉庫・ドックなどを設けねばならなかった。倉庫として、はじめ寺院を用いていたが、道台（地方長官）が返還をもとめたので、そこを空けた。

やがて造船所建設のための資材がつつぎと集まると、それらは覆い付の困い地のなかにうずたかく積まれた。清国人を船大工として使うための教育もはじまった。

同年十一月までに、四隻の砲艦の竜骨はすべて船台にのせられ、翌一八六四年には竣工した。が、四隻の砲艦の進水がいつ行なわれたかについてはわかっていない。

ともあれかれは寧波滞在中に、造船所・ドック・砲艦などをつくり、とくに後者の砲艦は「あらゆる専門家らの称賛的であった」という。

ヴェルニはその任務を無事に果たした功により、一八六五年六月レジオンドヌール勲章を授与された。

一八六四年十二月七日、ヴェルニーは寧波において造船所の完成や人員整理や収支の計算などにかかわっていたとき、ジョレス提督から手紙がきた。

それは日本政府が、フランス人の手を借りて、江戸のちかくに造船所を造りたがっており、この計画に参画する気持があるかどうかたずねるものであった。ついで同提督から第二信（一八六五年一月九日付）が届いた。それには、この手紙をうけ取ったら、寧波を二十日ほど留守にすることになるが、イギリスの郵船ですぐ横浜に来てもらいたい、といった主旨の文章がつづられていた。

ヴェルニーはその意を受けて、翌一八六五年一月下旬、造船所建設の資料と見積書をもって上海より横浜にやってきた。旅費は幕府が負担した。⁽⁶⁾ 来日後、フランス公使レオン・ロッシュ、閣老以下の委員らと造船所建設案について討議をかさね、ついに「横須賀製鉄所起立（建設）原案」なるものを作成した。

これは造船所を造るにあたっての基礎的条項（八項目）を定めたものである。

まず約定書のほうは、元治二年正月二十九日（一八六五・二・二四）、老中水野和泉守・若年寄酒井飛騨守らの連署をもってフランス公使レオン・ロッシュにわたされたが、それにはつぎのような事項がしるされていた。

それを現代風に直すとつぎようになる。

このたび横須賀港に、フランスの周旋によって製鉄所（造船所）が建設されることになり、フランス公使に相談したところ、そのすぐれた技能ゆえに造船技師ヴェルニーを推奨され、仏提督は上海からヴェルニーを呼びよせることに同意した。

今後のためにとりきめた項目は、左記のとおりである。

一、製鉄所一カ所、艦船の修理所二カ所、造船所三カ所、武器庫および役人、職人のための住居、などを四カ年で

完成させる。

一、横須賀湾の地形は、地中海岸のツーロンに似ているので、造船所はツーロンにあるものに倣い、横約四五〇間、縦約一〇〇間の地坪に建てる。

一、製鉄所、艦船の修理所、造船所の建設に要する費用は、一カ年六〇万ドル、四カ年で計二四〇万ドル。この金額をもって完成させる。

フランス政府へこの約定書を提出したら、右の六〇万ドルを用意し、四カ年間、毎年とどこおりなく支払うようにすること。

支払いについては、日仏両国政府の同意の手續を経て、フランス公使とヴェルニーが担当し、日本側は勘定奉行松平対馬守、軍艦奉行木下謹吾、目付山口駿府守、栗本瀬兵衛、浅野伊賀守らを取りあつかい、双方彼我のへだたりなくむつみ、和親をもととして取りきめる。

つぎに製鉄所起立原案についてのべると、横浜および横須賀製鉄所の関係、産業使節のフランス視察、資材の購入から設立の手順について規定している。

この原案は、一八六五年二月十一日（元治二・一・一六）に提出され、全文八節からなり、造船所設立のいわば青写真といえるものであった。

ヴェルニーの子孫宅にのこる草稿は、“AVANT-Projet d'un Arsenal pour le service de la Marine Japonaise”（日本海軍の使用に供される造船所の基本構想）と題するもので、フランス文にして十七ページある。

その中味は、船廠建設の端緒、工廠設立の方法、船廠の事務、フランス人の人事事項、邦官の組織事項、フランスおよび、日本国内で購入する品の概略、日本理事官（使節）のフランス派遣などに関することが詳しく示されている。

る。

横須賀造船所の工事は、一部変更も定められるが、概ねこの基本構想にもとづいて進められるのであるが、元治二年二月四日（一八六五・二・二九）には、レオン・ロッシュより造船所の設計図が提出された。

それにもとづいて、三賀保・白仙、内浦の三湾を埋め立て、七万四三三九坪の土地を収用し、ここに造船所の工事がはじまった。敷地を確保するために十二万八千両が計上され、寄場人足（囚人）三百名ほどが作業にしたがい、多くの石材や火山灰などが用いられた。

一八六五年四月ごろ、ヴェルニーは造船所で雇用されるフランス人の人選と物品の購入、フランス政府との連絡のためにいったん日本をはなれた。かれは上海に寄ったのち、同年六月初旬にマルセーユに到着した。

マルセーユには兄のアルチュールがおり、その家に数日やっかいになった。兄はマルセーユ生れのエリーズ・フルニエと結婚して四年になり、むすめが二人いた。

ヴェルニーは、寧波にいたときから間欠熱と胃病になやまされていたので、帰国を機に再検査をうけ、しばらく休養をとりたいとおもい、その旨を海軍省につたえたと、折りかえし休暇を許可との返事をうることができた。

やがてマルセーユを発ったヴェルニーは、故郷のオブナにむかった。約三年半ぶりのなつかしいわが家には、家族らがかれの帰郷を待ちわびていた。

祖父のオーギュスト・ヴェルニー（七十八歳）はまだ健在であったし、父親のアメデー・ヴェルニー（五十五歳）はかくしゃくとしていたが、製紙工場の経営のむずかしさから、すこしつかれ気味であった。そのほか愛する母、兄弟姉妹らの顔があり、家族一同ひさびさにだんらんした。

けれど哀しむべき知らせがつたえられた。かれの三歳下の弟ジョルジュが、不慮の事故がもとで二十三歳を一期に

亡くなっていたからである。

ヴェルニーの父は、ボンドブナとマルバ（ボンドブナから、四、五キロの地点）に製紙工場を二つもっていた。弟のジョルジュは、その工場のボイラーを修理中に爆発がもとで亡くなったのである。

ヴェルニーは、オプナでゆっくり外地勤務のつかれをいやしていたとき、海軍省よりマルセーユにおもむき、日本使節（柴田日向守）一行の到着をまち、かれらをツーロン軍港に案内せよ、といった命をうけた（八・一三付）。

コレラさわぎのためラトノー島で道草をくっていた柴田一行が、マルセーユの波止場でヴェルニーの兄アルチュール⁽⁹⁾の出迎えをうけたのは、一八六五年八月二十六日（慶応元・七・六）のことであり、ついでその翌日ヴェルニーは一行の旅宿「グラントテル・ド・ノアイユ」⁽¹⁰⁾にやってきた。

ヴェルニーが柴田理事官一行と行をとにしたのは、一八六五年八月二十七日（慶応元・七・七）から同年十二月七日（慶応元・一〇・二〇）までの約四カ月間である。

ただし柴田らがイギリスに滞在した一八六五年十二月八日（慶応元・一〇・二一）から翌年一月四日（慶応元・一一・一八）までの二十八日間、ヴェルニーはかれらに同行しなかった。

一行は二十九日にヴェルニーの案内をうけてツーロン軍港をおとずれ、数日間視察をおこなったのち、リヨンを経て九月六日バりに到着し、直ちに「グラントテル・デュ・ループル」（現・オテル・ループル・コンコルド）に入った。

九月十六日（七・二七）柴田らはホテルを引きはらうと借家（ジャン・グージョン街五十一番地、伯爵の別邸、写真参照）に移り、イギリス視察旅行に出発するまでここでくらしした。

ヴェルニーもほどなくアパートぐらしをはじめると、日々柴田の寓居に顔をだし、その用を便じた。しかし、日本

人の世話をするようになってから個人的出費がかさんだものか、数百フランほどの前借をたびたび願いでている。

九月十八日、柴田は外務大臣ドルーアン・ド・リュイスと会った折、ヴェルニー招聘の承諾をえた。その後雇用契約が成ると、ヴェルニーは本格的に機材の購入やら雇用の人選にとりかかった。

鍛冶屋、仕上げ工、機械技師、金物製作人などをツーロン、プレスト、ロリアン、シェルブールの各海軍工廠からあつめた。また造船所をつくる第一歩として、雇フランス人のための住宅を建てる必要から、とくに建築課長レノウ、建築頭目デュモン、製図・建築職工長バスチャンら三名をやとい入れた。

のちこれら三名は、柴田一行が工作機械類とともに帰国の途につくとき同行し、一八六六年三月十二日（慶応二・一・二六）フランス郵船「デュプレックス」号で横浜に先着した。

柴田理事官はバリにおいて用事をすませるかたわら、諸所方々に出かけているが、なんといつてもいちばん重要な見学や視察は、海軍工廠のそれであった。

マルセーユに上陸してから帰国の途にのぼるまで、かれらがヴェルニーに連れられてじっさい訪れた場所を列举すると、つぎようになる。⁽¹⁾

ツーロン

帆船索綯所、製鉄所、船具置場、浮ドック……………	七月九日（一八六五・八・二九）
工作機械、動力機関類、ボイラー室、鋳ものの工場	
製図局、船舶修繕所、葉きょう工場、石炭置場……………	七月十日（八・三〇）
大砲製作場、武器庫、牢獄	

海軍病院（サン・アンドリエ——ツィロン港口の岬）、国王専用の蒸気船 七月十一日（八・三二）
造船所、消防員置場、材木置場、機関工場 七月十二日（九・一）

マルセーユ

保税倉庫 七月十三日（九・二）

リヨン

織物工場、貯水場 七月十六日（九・五）

パリ

貯水池（ミニルモンタン——現・パリ十九区、ペール・ラシェーズ墓地ちかく） 八月二日（九・二二）
ブローニュの森 八月三日（九・二三）
博覧会場 八月四日（九・二四）
順化園（動・植物園——ブローニュの森） 八月八日（九・二七）
パノラマ館、モンソー公園 八月十四日（一〇・三）
下水道 八月二十日（一〇・九）
雷管工場、ノートル・ダム寺院 八月二十一日（一〇・一〇）
火薬工場（ブーシェ——パリの南方） 八月二十二日（一〇・一一）

造幣所、メッキ工場	十月四日（一一・二二）
鉾山学校、製氷工場	十月十二日（一一・二九）
水道・下水道（建造中）、パリ万博会場（建造中）	十月十五日（一二・二）
ゴブラン工場	十一月二十三日（一八六六・一・九）
国立図書館	十一月二十四日（一一・一〇）
索綯工場、鉄具工場	九月十八日（一八六五・一一・六）
ロリアン	
機関ポンプ（ドックの水をからにする）、鉄工場（鉄板、ネジ、棒状の道具などをつくる）、船材工場	九月二十一日（一一・九）
ナント	
鋳物工場	九月二十六日（一一・一四）
アンドル	
鋳物工場、石灰石置場、各種機械製作場、のべ鉄・鉛・蒸気釜等の貯蔵所、製図局	九月二十三日（一一・一一）

サン・ナゼール

木材工場、軍艦修繕所、船中で用いる布団・シート・雑巾などをつくっている工場、
新造の郵船、保税倉庫、ドック、防波堤、鋳物工場（民間）……………九月二十五日（二一・一三）

アングレム

博物館（古器、化石、草木、鳥獣虫魚）、大砲鋳造所（海軍）……………九月二十八日（二一・一六）

シャテルロー

小銃製造工場、試射場、銃砲刀剣貯蔵所……………九月二十九日（二一・一七）

エソンヌ

製紙工場……………十月八日（二一・二五）

ル・クルーゾ

製鉄工場、コークス製造所、器械製作所（海軍）……………十一月三十日（二八六六・一・一六）

フランスの主要な港では、各新聞社の記者がニュース価値のあるひとの出入りにたえず注意をむけているのだが、チョンマゲに大小をたばさんだ柴田一行は、異様な風体ゆえに、その網にひっかかり、たびたび新聞の紙面をにぎわした。

そのいくつかを紹介してみよう。

一行のマルセーユ到着とツーロン訪問をつたえる記事につきのようなものがある。

昨日、イギリス会社の郵船「ニウダ」で、アレクサンドリアからやって来た日本使節が到着した。一行がやって来ることにについては、一昨日以来、知らせが入っていた。この使節は総数六名であり、従者を四名ともなっている。

筆者が「使節」と呼んでも、この言葉は適切ではないのである。なぜならこの使節は、まだ公式に歓迎される機会を得ていないからである。一行はしゅくしゅくと、こっそりノアイユ街の「グラントテル」に投宿した。

使節は、月曜日から火曜日にツーロンにむかい、そこで一日すごす予定である。（「ラ・ガゼット・デゼトランジェ」紙（八・三一付）。

八月二十八日、マルセーユ電。

一昨日（注・八・二六）の午後、P & O会社の「ナイアンザ」号で日本使節団が到着した。使節団は、六名からなり、四名の従者をともなっていた。かれらは派手な装いではなく、数日前から予約してあったノアイユ街の「グラントテル」に投宿した。

大君の使節は、月曜日から火曜日にツーロンに行くことになっている。そのあとマルセーユにもどり、パリにおもむく（後略）（「ジュルナル・デ・デバ」紙（八・三〇付）。

わが国にやって来た日本人たちは、いまツーロンに来ている。かれらはいわゆる使節団ではないが、大貴族が四名いる。かれらが西洋にやって来たのは、産業や航海術について学ぶためである。

一行にフランス人技師ヴェルニー氏が同行しているが、かれは日本人らの研究を助けるためにフランス政府がつけたものである(『ル・プティ・ジュルナル』紙(九・二付))。

柴田一行のツーロン軍港見学は、かれらの耳目を大いにおどろかすに足るものだった。

「日本人はツーロン滞在に満足したようだ。かれらはとくに乾ドックをみてあせんとした。かれらは明日ツーロンを立ち、マルセーユで日曜日をすこす。翌々日はパリに直行する」(横浜のフランス公使館発、海軍大臣宛書簡Ⅱ一八六六・五・一二付)。

一行はツーロン軍港の視察をおえたのち、マルセーユからパリにむかうのだが、途中でリヨンで一泊している。そのとき現地の『ル・プティ・ジュルナル』紙(九・六付)は、わずかに一行がかげ、「フランスにやって来た日本人らは、リヨンに到着した」と報じたあと、翌日つぎのような短い記事をのせた。

日本人については、すでにリヨンに到着したことをお知らせしたが、当地においてかれらは万人の好奇心の的になっている。日本人の服装は、とくに風変わりなところはない。

ただいつも群衆をどっと笑わせている、ばかでかい帽子(陣笠—引用者)を除いてのことだが。かれらはとても利発な顔つきをしている。何人かは、フランス語や英語をなんの造作もなく話す(『ル・プティ・ジュルナル』紙(九・七付))。

また『ル・クーリエ・ド・リヨン』紙(九・五付)は、「地元のニュース」の欄に、つぎのような長文の記事をかけた。

昨日の朝（九・四―引用者）、久しくバりに居住している、大君の帝国海軍の士官三名が、リヨンの「グラントテル」に投宿した。それは肥田⁽¹²⁾、フウレ⁽¹³⁾、齊藤⁽¹⁴⁾の諸氏である。

かれらはフランス人のような装いをし、洋服をじょうずに着こなしており、わが国にやって来た最初の日本人（文久使節団―引用者）とほとんど似てはいなかった。

顔色は赤茶けておらず、目の表情は東洋人に特有のものではなく、長いまっ黒の頭髮は、日本式にうしろから掻きあげられてはいなかった。

三人のうち一人は、大きな口ひげをはやしていた。最年長のものは、三十歳か三十五歳くらいにみえた。かれらはフランス語をはなし、リヨンめぐりをするために馬車に乗りこむとき、フウルヴィエール（ロヌス川の左岸にある丘―引用者）とテ―ト・ドール公園へやってくれ、といった。

これら三名の士官は、当地において同国人を待っているところである。すなわち、十名からなる日本使節団のことだが、この一行については、わが紙の八月三十日号においてすでに紹介済みである。

日本使節団も昨日、夜八時に「グラントテル」に投宿した。ホテルの出入り口の前には、午後七時から相当な数の群衆がたむろしていたが、バルコニーにひるがえっている、白地に大きな赤い月が描かれている旗に惹かれてのことであった。

使節団の団長がホテルの階段をまっ先にのぼったとき、やじ馬たちはかれがかぶっている帽子の形のせいであったかも知れぬが、爆笑した。

その帽子の大きさについていえば、われわれの雨傘よりもずっと大きい。そのような帽子は地位の高さのしるしのようだが、なぜなら他の日本人は、ずっと控え目な大きさの帽子をかぶっていたからである。かれらはとても陽気であった。じぶんなりに大衆の好奇心を大いにたのしみ、身ぶり手まねを駆使しても、ホテルの客ややじ馬にじぶんたちの意を伝えることができぬとわかると、哄笑した。

かれらはひじょうに細かいタバコをパイプですっていた。パイプの管はふつうの大きさだが、火皿はとても小さい。大部分の者は、半ばフランス的か日本的なよそおいであるが、ともかく簡素な服装である。かれらは大貴族であろうと高級

士官であつたとしても、服装はじつに質素であつた。かれらは左のわき腹に、つばの付いていない、みじかい三日月刀のようなものを差していた。

この使節団の何人かは、抜け目のない、利口な顔つきをしている。その内のひとり、英語をけっこう自在に話すのだが、長いこと旅行者と話をし、かれの同胞とおなじように、とても愛想がよかった。

先にお知らせしたように、かれらは大使の資格で西洋にやつて来たのではない。商工業や航海術、防衛や各所における兵器配備などに関する重要な問題について研究するために、政府によって派遣されたのである。

それにはわが国の海軍工廠を訪れ、それを建設するために必要な物品を調達しなければならない。大君はシモノサキ（横須賀の誤り―引用者）に海軍工廠をつくるつもりでいる。

使節団は六名からなり、団員名はつぎのとおりである。

柴田日向守閣下……………日本政府の使節

水品菜太郎……………首席書記官

塩田三郎……………秘書兼通訳

福地源一郎……………同右

富田達三……………委員付秘書

小花作之助……………使節付委員

その他四名は、日本陸軍の士官たちである。

使節団には技師のヴェルヌ氏（ヴェルニーの誤り―引用者）が同行している。使節団に自由に使ってもらうために、フランス政府がヴェルヌ氏をつけたのは、かれらの研究を容易にするため、またその研究を指導するためである。

使節団は、すでにマルセーユとツーロンを訪れた。かれらは数日リヨンですごしたのち、パリにむかう。そのあとイギリスを訪問する予定である。

柴田一行はイギリス訪問もおえ、フランスより帰途につくにあたり、フリーリー・エラル（銀行家）にすべてをゆだね、一七四万フランの大金をあずけた。ヴェルニーはその後なおも資材の調達や雇入れなどの雑務をおえると、一八六六年四月十六日マルセーユ港を出帆し、同年六月八日（慶応二・四・二五）デュプレックス号でふたたび横浜にやってきた。

このときかれは、製図工長メラング、化学・精密師ボエル、船具頭目リチオニ、会計課長・書記モンゴルフィエら四名をとまなっていた。

横浜に着いた翌日、ヴェルニーは早くも横須賀におもむき、土木工事の進ちょくを視察し、ふたたび横浜にもどると、雑務をおえ、六月十八日から横須賀に移り、バラック住いをはじめた。

さみしい村にすぎなかった横須賀は、造船所の建設地となるや、山地を切りひらいて平地としたり、海を埋めたりする作業が急いで進められた。まず雇フランス人のための宿舎がつくられ、ついで各工場建設の突貫工事がすすめられた。

急ピッチで進められる工事の進ちょくぶりは、ヴェルニーをはじめとするフランス人たちをおどろかせた。ヴェルニーの設計により、二つの入江は埋立てられ、一つの山は取りはらわれ平地となり、その上に船台・倉庫・工場などが建てられることになった。

横須賀は、まさに造船所を造るのにあつらえむきの所であった。港は外洋の風波にさらされた錨地とは異なり、天然の泊まり地を形成しており、多数の艦船を入れられるし、水深もじゅうぶんにあった（海軍大臣宛、ローズ提督の報告——一八六六・四・六付）。

横須賀造船所がしだいに形をととのえてゆくにつれて、雇フランス人の身辺を保護する必要から、近くに詰所や見

張り所がもうけられ、また専用区域内を巡回させた。⁽¹⁵⁾

建造物（木造家屋）は、日を追うごとに完成していった。

慶応二年三月……………ヴェルニーの官舎（八九坪）

医師の官舎（五二坪）

集会所（七四坪）

五月……………平屋二棟（一八九坪）

妻帯者用の平屋三棟（二三三坪）

官舎および製鋼工場（八〇一坪）

七月……………学校（八八坪）

馬小屋（一、三〇六坪）

他方、造船所の敷地内にあった農家二十二戸は、陰暦四月に移転させられた。⁽¹⁶⁾

ヴェルニーはまた造船所建設の基本構想にあるように、造船所内に技術者を養成するための理科系の専門学校（鑛舎）を設立する考えを抱いており、五月七日（六・一九）サムライの子弟のなかから伝習生（技術者と職工）を採用し、船廠業務にあたらせることにした。

当初、工事には日本人の職人（大工、左官、蒔、土工）や寄場人足を使い、のち雇フランス人技術者らとの協力のもとに建設工事をすすめた。が、青写真どおりに仕事をすすめるうえで用いられたのはフランス語であった。

現場における橋わたしを果した訳官（通訳）には、塩田三郎や立嘉度^{トカ}がおり、のち名村泰蔵などがあつた。工事

の一部を請負った堤磯右衛門などは、じぶんの扇子に日常用いるフランス語を書きこみ、それをみながらフランス人のうけこたえをしたという⁽¹⁷⁾。

ヴェルニーは横須賀造船所の工事を統率ある長として逐次本国からやってくる同胞四十余名を指揮し、工事をすめた。

ちなみに横須賀造船所の雇フランス人は、慶応年間から明治十三年まで、九十二名をかぞえ、横浜製鉄所のそれは二十一名、両所で雇用されたフランス人の総数は一一七名にものぼり、一つのフランス人社会をつくった。⁽¹⁸⁾

このうち慶応年間、横須賀造船所に勤務した主な雇フランス人技師の氏名をあげると、つぎのようになる。

氏名	職務	来日年月日	月給 (メキシコドル)	備考
レノウ	建築課長	一八六六・三・一二	四〇〇	慶応一・二・二八、病死
フランソワ・レオンス ・ヴェルニー	首長	一八六六・六・八	八三三	
ルイ・メラング	造船方 製図工長	一八六六・六・八	二二五	妻子同伴
フェルディナン・ゴートラン	工事〔機械〕課長	一八六六・七・一三	四〇〇〜四五〇	
ポール・アメデー・ル ドヴィッツ・サヴァティエ	医師	一八六六・七・一三	四一六	妻子と召使いを同伴
ルイ・フェリックス・フロラン	建築課長	一八六六・一一・九	四〇〇〜五〇〇	
ジュール・セザール・クロ ード・チボーディエ	副首長	一八六八・八・八	六〇〇	

このなかでもっとも高給をもらったのは、造船所の実質上の所長ともいうべきヴェルニーの月給の約八三〇ドル

(メキシコドル)である。これは年俸にすれば、約一万ドルにも相当した。⁽¹⁹⁾

ついで高給を取ったのは、副首長チボーディエの六〇〇ドル、医師サヴァティエの約四二〇ドル、さらに建築課長レノウとフロラン、工事課長ゴートランらが、約四〇〇ドル以上ももらっている。かれらの年俸は、四、五千ドルにもなった。その他の職工や技術員となると給金は低く、上記六名のものと比べると、その二分の一か三分の一ほどであった。

来日前の雇フランス人の勤務先は、ツーロン、マルセーユ、ブレスト、ロリアン、シエルブル、ロシュフォル、アンドレー、ナントなどにある造船所や工廠や製作場などであり、かれらはそこから集められたのである。

建築資材としては、木材を使ったほか、敷石には伊豆や相模の石材が用いられた。しかし、これらの建築材料以外に必要とされたのは、製鉄所建設のためのレンガである。しかもそれを多量に使わねばならなかった。そのため一八六六(慶応二)年五月、構内にまずレンガ工場をつくり、そこで天城山産出の白土をもって耐火レンガの製造に着手し、それに成功した。そのレンガ造りを担当したのはポエル(ブレスト造船所舎密掛、精密師)である。一八六九(明治二)年に観音崎や野島崎につくられたわが国初の洋式灯台には、このレンガが用いられた。

慶応二年七月、ヴェルニーは横須賀と横浜間、その他の地におもむくために小型の蒸気船の建造を上申し、それが容れられるや、三十馬力と十馬力の小気船をつくった。同三年に入ってからも工事はつづけられ、三月に第一ドック(全長六十三間八分)の開さくがはじまり、明治四年に完成した。

横須賀造船所の工事は、日仏双方の協力のもとに、埋立て工事にはじまり、ついで雇フランス人用の宿舎、詰所や見張所、首長(所長)や医師および妻帯者のための宿舎などがもうけられ、それができると製綱工場、各種工場、学校、馬小屋、レンガ工場、ドック、船台、蒸気船などが計画にしたがってつくられて行った。

ヴェルニーは、一八六七年三月中旬（慶応三・二）から同年四月末まで約一カ月ほど上海ですごした。横須賀を留守にしたのは婚姻のためである。

かれは寧波から日本へむかう前に第八代上海領事のブルニエ・ド・モンモラン子爵（一八六四・一二—一八六九・三在任、のち北京公使）と知りあいになっていた。モンモランには娘が三人あった。

ヴェルニーは、その末娘のマリー（一八三九生まれ、当時二十八歳）との縁談が進んでおり、結婚式をあげるべく上海にやってきたのである。式は四月二十二日上海の教会で行なわれ、それがすむと新婦をともなつて横須賀にもどってきた。

*

ヴェルニーの指導のもとに造船所は、着々とかたちをととのえて行つたが、慶応三（一八六七）年十月十三日薩摩藩に討幕の密勅がくだり、翌十四日には長州藩にもおなじように討幕の密勅がくだった。同日、慶喜は大政奉還を上奏し、翌日それが許可された。

同年十二月、朝廷は慶喜の將軍辭職をゆるし、王政復古を宣言した。

慶応四（一八六八）年一月三日、鳥羽・伏見の戦いがおこり、幕軍は敗退し、慶喜は海路江戸に帰った。十五日、新政府は王政復古を各国に通告した。

新政府軍（薩長の連合軍）が江戸にむかって進撃を開始すると、旧幕府はまず武蔵金沢藩主・米倉丹後守昌言に横須賀造船所の警備をめいじ、慶応四年一月十九日さらに佐貫藩主・阿部駿河守正恒にも警備をめいじた。

二月二十四日（三・一七）、製鉄所掛であつた海軍奉行京極高富は若年寄を免ぜられ、勘定奉行服部筑前守常純が製鉄所掛となつた。

三月五日（三・二八）新政府軍の先鋒が箱根を越えたので、旧幕府は浅野美作守氏祐・川勝備後守広運兩人の名をもって、ヴェルニーにしばらく工事を中止して、フランス人はみな横浜に退去するよう、勧告した。

ヴェルニーは「造船所の総裁は、フランス人は横浜に退去するよう、わたしに命じた」と述べている（海軍・植民地省大臣宛ヴェルニー書簡、一八六八・四・一三付）。

日本の革命さわぎをすでに耳にはさんでいた横須賀のフランス人たちは、もっともこの頃になると仕事の手をゆるめており、日本人の職人らに暇をださねばならぬ状態であった。⁽²¹⁾

ヴェルニーは「政治的事件のとばっちりをうけ」た⁽²²⁾といい、フランス政府が引きうけた事業をいま中断して、横浜に退去することはできない。雇フランス人の保護と不測の事態にそなえて通報艇「キエン・シュ」号を横須賀港に碇泊させることにし、そのまま横須賀にとどまった。⁽²³⁾

四月にいたって製鉄所掛は、横浜と横須賀の製鉄所を旧幕府から新政府に引きわたされることになった旨、ヴェルニーに通告した。

閏四月一日（四・二三）、新政府は横須賀造船所を受けとるために、神奈川裁判所総督東久世通禧と副総督鍋島直大を横須賀に派遣した。両人は裁判所判事寺島宗則、井関斎右衛門ら属僚をとめない、フランス軍艦にのり横須賀にむかった。

一行は旧幕府の製鉄所奉行並新藤紹蔵以下にむかえられ、各所を点検したのち、フランス艦上において收受の手続きをおえると、その日のうちに横浜に帰った。翌日より神奈川裁判所は、横須賀造船所を接收し、判事寺島宗則と井関斎右衛門が主任官として管轄することになった。

新政府はフランス公使ロッシュに、これまでどおり造船所の工事をつづけるよう、またヴェルニーには、主任官を

旧幕府の製鉄所掛とおなじようにみなすよう通知した。⁽²⁴⁾

新政府に造船所が接収されるに際して、ヴェルニーは慶応元年八月の起工から同四年三月までの間に要した諸経費（機械の購入、土木工事費、家屋の建造費、人件費などをふくむ）を報告した。それは約一五〇万八四〇〇ドルにもなり、造船所が完成するまで、さらに約八三万ドル以上かかることが予想された。⁽²⁵⁾

旧幕吏に代わって横須賀に着任した新政府の役人らがおどろいたのは、横浜と横須賀の両製鉄所が担保に入っており、フランスへの支払金、四三万ドルの約定書突きつけられたことである。

新政府はそれを知って、大いにおどろいたが、財政難の折から抵当をとられるのはやむをえない、とおもった。しかし、時の外国事務判事・大隈重信は、断固政府の態度に反対し、イギリス公使パークスをうごかし、横浜のオリエンタルバンクから年一割五分の利息で同年七月に借り入れ、フランス側に返済した。⁽²⁶⁾

このころ新政府の金蔵は空っぽであり、日本人の職人に賃金を払うことに窮するほどであった。東久世は高給とりの雇フランス人を解雇し、いったん工事を中止する肚であったが、ロッシュの後任ウートレ公使やヴェルニーらの反対にあい、事業を続行することにした。

九月四日（一〇・二三）、明治天皇が即位し、明治と改元。十月十三日（一一・二六）、江戸城を東京城と改称。

フランスより灯台用機械を送ってきたので、ヴェルニーはルイ・フェリック・フロランに命じて、わが国初の洋式灯台を観音崎に設けさせた。

明治元（一八六八）年九月ごろ、ヴェルニーは副首長のジュール・セザール・クロード・チボーディエに、一時フランスにもどりたいので、半年ほど首長（所長）を勤めて欲しい、と申し出、同人が承知したので、翌明治二年（一八六九）五月はじめに賜暇休暇をえて帰国の途についた。

ヴェルニーの一時帰国⁽²⁷⁾の真意はあきらかでないが、かれが海軍大臣に出した書簡には「いま妻の健康が気がかりなので、フランスに連れ帰る必要があります」とある。

ヴェルニーは妻マリイをともない故郷のオブナに帰省し、そこで数日すごしたのちパリにむかった。

ヴェルニー夫妻は、明治三年（一八七〇）三月末⁽²⁹⁾ごろ横須賀にもどった。

明治四（一八七二）年四月九日（五・二七）、この日製鉄所の名称が改められた。

横須賀製鉄所……………横須賀造船所

横浜製鉄所……………横浜製作所

同年八月十五日（九・二九）、工部少丞肥田浜五郎（旧幕臣）が造船兼製作頭に任じられ、横須賀に在勤するようになった。

明治四年十二月末、造船所の職員と工員数は、つぎのとおりである。

造船製作権頭・平岡通義以下の吏員……………四六名

技術官・細谷安太郎以下……………三一名

雇フランス人（ヴェルニー以下）……………二五名

工員……………一〇一六名⁽³⁰⁾

明治五（一八七二）年ごろ、造船に必要な各種の工場や部局（旋盤、鑪鑿、鑄造、製罐、整飾、鍊鉄、船渠、滑車、建具、填隙、鋸鉋、製網、船具、製図など）が所内につくられた。

ドックについていえば、明治四年から同七年にかけて、第一号、第二号船渠が完成した。

明治五年五月、ヴェルニーの指導をうけて造った天皇の内海巡幸用の御召船「蒼竜丸」(木製一五二トン)の進水式がおこなわれた。同年十月海軍大丞・赤松則良(旧幕臣)は、主船頭が欠官のため、かりにその任につき、事務を執りおこなった。なお、このころ造船所は、工部省から海軍省に転属になった。⁽³⁾

明治六(一八七三)年二月、ヴェルニーは軍艦建造を依頼された。わが国初の国産軍艦「清輝」(三本マストのバーク型帆船、排水量八八二トン、長さ五八・六メートル、幅九・一メートル、四四三馬力、速力一一ノット)が起工され、同船は明治八(一八七五)年三月に進水した。

これまで横須賀で建造された、あるいは建造中の船舶は、木造の約七〇トンから三〇〇トンほどの小型の船でしかなかったが、「清輝」は九〇〇トンちかくもある軍艦と名のつく大型艦であり、その図面を引いたのは海軍技手の上田寅吉(もとオランダ留学生)であるが、ヴェルニーの功も多とせねばならぬ。⁽³²⁾

進水式には明治帝をむかえ、国産第一号艦の誕生を横須賀の村民とともに祝った。

新政府にとって、お雇い外国人は金がかかることが頭痛のタネであった。造船所の全面的主宰権をとりもどし、諸経費を節減するために、日本政府はついに明治六年十二月、フランス公使サン＝カンタン伯に、ヴェルニーと医師サヴァティエの解任を申し出、ふたりの承諾をえた。

ヴェルニーの解嘱は、明治九(一八七六)年三月三日のことである。が、明治七(一八七四)年ごろまでに、すでに雇フランス人の数は減少し、わずかに二十六名であった。

ともあれヴェルニーは、解約通告をうけた明治六年の盛夏、東北へ旅行している。明治六年八月十九日、一行六名は横浜からネポール号に乗ると、海路仙台にむかい、三週間ほど同地を中心に旅をつづけたが、それは横須賀造船所で用いる船材の調査と購入が目的であったようだ。⁽³³⁾

明治八年（一八七五）十月、初代の造船所長官として、海軍秘書官兼主船助・遠武秀行が任じられ、ついで翌九年主船寮長官兼横須賀造船所長に赤松則良が就任した。

同年十二月二十八日、ヴェルニーとサヴァティエ（医師、植物学者）は、海軍大輔川村純義のあっせんによって宮内省におもむくと、明治帝の謁見をうけ、かつ勅語をたまわった。

明治九（一八七六）年一月十六日、送別の宴が芝の延遠館でもよおされ、ヴェルニーはサヴァティエとともに出席した。このとき宴席には三条太政大臣以下多くの頭官が列席したが、ヴェルニーは書棚と花びん一對、夫人には琥珀織二巻が贈られた。

同年二月二十六日、ヴェルニーは日本政府に在任中の経過を振りかえり、それを六項目にまとめた報告書を提出した。

*

幕末から横須賀造船所の創設につくしたヴェルニーは、明治九年三月十二日⁽³⁴⁾妻子をとめない、横浜よりフランス郵船「タイナス」号で帰国の途についた。

ちなみにヴェルニー夫妻には、日本滞在中に三人の子どもが生れた。

フランソワーズ（長女）……………一八七〇年十二月二十一日、横浜に生まる。

ジョルジュ（長男）……………一八七四年一月一日、横須賀に生まる。

エドメ（次女）……………一八七五年七月十七日、横須賀に生まる。

マルセーユに着くと、かれは消化不良と衰弱を理由に二十日間⁽³⁵⁾の休暇を当局にもとめ、あとから要求を六週間に伸ばした。

帰国後、ヴェルニーはフランス海軍に気に入った勤め口がみつかるものと思っていた。が、職さがしはなかなか思ひどおりにはゆかなかった。

海軍造船工学校に教授職の空きはないかたずねたが、いっばいと返事をえた。かれはツーロンの工廠に職さがないの手紙をだそうかとおもったが、そこで働く技師たちから歓迎されないことを知っていた。

ようやくローヌ県にある海軍工廠で監督官のような仕事をしばらくやったのち、一八七六年十一月から十二月にかけてロッシュュラールモリエールとフィルミニーの町の炭坑の役員会とたびたび接触をもつようになり、やがてかれは炭坑の所長になった。

ロッシュュラールモリエールとフィルミニーは、ロアーヌ県の県都で工業都市のサンティエンヌ（フランス中部、パリの南東五一七キロ）から数キロの地点にあるいなか町である。この地域は十八世紀すえから炭田が開発され、急速に鉄工業、金属、兵器産業がさかんになっていた。

なにがヴェルニーを炭坑経営にむかわせたものか明らかでない。が、かれは海軍省に無給休暇を申し出、それが許可されると、こんどは退職願を提出した。

一八八一（明治十四）年、ヴェルニーは役員会の賛同を得ると、石炭商の代表としてサンティエンヌ商工会議所の会員の選挙に立候補し、みごとそれに当選した。

翌一八八二年、かれは商工会議所の幹事となり、一八九五年に引退するまで、その地位にあった。炭坑の所長としてのヴェルニーのしごとは、週一回サンティエンヌに出かけ、会頭と会ったり、会議の準備をしたり、書類をみた

り、鉾山学校設立にかかわったりすることであつたらしい。⁽³⁶⁾

一八九〇（明治二十三）年の春、坑夫らの賃上げ要求（坑内ではたらく者は八フラン、坑外の労働者は六フラン）が経営者側から拒否されると、ゼネストとなり、ヴェルニーは心労により、へとへとになった。

ともあれかれは一八九五（明治二十八）年までフィルミニー（サンティエンヌの市から約三キロ）のいなか町でくらし、この年すべての職を辞し、故郷のオブナに帰った。

オブナにもどつたヴェルニーは、七年前に求めたオブナ橋の家に身を落ちつけると、悠々^{ゆうゆう}自適^{じてき}の生活をはじめた。いつも地味な服装をし、俗事に心をわずらわされず、のんびりとした暮らしがはじまつた。が、無為の生活ではなかつた。ときどき実業家が、かれの意見を求めてやって来ると、相談にのつてやつた。⁽³⁷⁾

ヴェルニーは、小説というものをあまり好まず、あるときまたま手に取つた本を読みだすと、「ふうん／＼人生はそんなもんじゃないぞ」と叫んだ⁽³⁸⁾りした。

酒はあまりたしなまなかつたものか。タバコは、一日三本ときめていた。

ヴェルニーはよわいを重ねるにつれて、体力がおとろえて行つた。一九〇八（明治四十）年五月二日午後七時ごろ、肺炎により自邸において亡くなった。享年七十一歳であつた。

子どもたちに、葬儀は質素におこない、死亡通知も肉親とじぶんが関係したフィルミニーとサン・シャモン^{サン・シャモン}の会社の経営者だけに出すよう命じた。教会のミサを欠かさず、教会には施しものを与えるようにいい、とくに妹イザベル（一八四五―一九一〇）のために、互いに金をだしあい、年五〇〇フラン送金するよう、言いのこした。

*

ヴェルニーら雇フランス人たちが帰国してからも、横須賀造船所は、年をへるごとに伸展と拡充をつづけて行つた。

横須賀造船所の創設以来、その管理や指導に大きな力をもっていたのはヴェルニーであった。が、明治八年五月、ときの肥田主船頭は、それまでヴェルニーが握っていた権限を制限する改革案を政府に提出し、その結果、造船所所長は事務系統を、首長（ヴェルニー）は技術系統のみを掌握することになった。⁽³⁹⁾

事業の総括と遂行に際しては、両者が話しあい、しかるのち海軍卿が裁定し許可することになった。

明治十一（一八七八）年一月、海軍中将中牟田倉之助が所長に就任し、やがてかれの転任後、同十九年ごろまで所長の不在がしばらくつづいた。明治十五（一八八二）年二月、約十五年間「横須賀造船所」として呼称されてきたものは名称変更となり、あらたに「横須賀海軍造船所」となった。

横須賀造船所では、予定されていた全工場が完成したのは明治四年ごろであった。その後もドックの建設や諸機械製造の工程が着々と進捗していった。

造艦のほうは、フランス人技師らの手を借りて明治六年から同十一年ごろにかけて、迅鯨をはじめとし、清輝・天城・磐城・海門・天竜などが起工された。

近代海軍の建設には、造艦と海軍士官の養成が急務であるが、新政府は築地に創設した海軍操練所を海軍兵学寮にあらため（明治3）、イギリス式の海軍教育をおこなった。のち同校は海軍兵学校に改称され（明治9）、さらに広島県江田島に移転した（明治21）。

明治五年十二月、徴兵令が公布されたのち、同六年浦賀に海軍屯所が設けられ、横須賀にも海兵隊の演習所が設立され、海軍要員の養成につとめた。九年十二月、横須賀に横須賀水兵屯集所（新兵の教育訓練機関）があらたに設けられた。

明治九年九月、海軍省は横浜に東海鎮守府を仮設し、のち横須賀に移し、造船所・艦船・倉庫・兵営・病院などを

統轄させた。のちに横須賀鎮守府と改称された(明治17・12)。造船所も海軍病院もこの鎮守府の所轄であった。

明治十六(一八八三)年以後、陸海軍とも大拡張期にはいった。

横須賀海軍造船所においては、大艦用のドックの開さくがはじまり(明治17・7)、施設の拡充をはかり、鉄船をつくるための機械工場やクレーン(六〇トン)の建設、鋼鉄艦の建造が明治二十年ごろまでつづいた。とくに技術面では自立がはかられ、お雇い外国人にたよらず、艦の設計から工事監督まで日本人の手で行なわれた。

また横須賀を中心として、

海軍機関学校(明治20・7)

横須賀鎮守府海兵団(のち横須賀海兵団)(明治22・4)

海軍砲術学校(明治26・12)

海軍水雷学校(同右)

などが設けられたほか、昭和二十年の敗戦時まで、呉・佐世保・舞鶴とならんで四鎮守府のひとつが置かれた。横須賀海軍造船所では、明治二十年代後半から同年末まで、つぎのような艦がつくられ進水式をおこなった。

須磨(三巡、二六五七トン)	明治28年
明石(三巡、二六五七トン)	明治30年
千早(通報艦、一二三八トン)	明治33年
新高(三巡、三三六六トン)	明治35年
音羽(三巡、三〇〇〇トン)	明治36年
薩摩(一戦、一九一五〇トン)	明治39年

鞍馬（巡戦、一四六〇〇トン）……………明治40年
河内（戦、二〇八〇〇トン）……………明治43年

外国への軍艦の注文は、明治四十四（一九一一）年にイギリスに一等巡洋艦“金剛”を発注したのをさいごに、じらいおこなわれず、艦船はすべて国内の官営または民間の造船所でつくられるようになった。

日清、日露の両戦役後、さらに海軍力を充実させる必要から、明治の末から大正初年にかけてつぎのような巡洋戦艦の建造に着手した。

扶桑（巡、三〇六〇〇トン）……………明治44年ごろ
榛名（巡、二七〇〇〇トン）……………"
霧島（同 右）……………"
山城（戦、三〇六〇〇トン）……………大正2年
伊勢（戦、三二六〇〇トン）……………"
日向（戦、三二六〇〇トン）……………"

明治四十年代、海軍においては、国防艦隊編成の中心を八、八艦隊（戦艦八、巡洋艦八）においていたが、大正から昭和初期にかけてのワシントン、ロンドン軍縮制限条約の結果、六、四艦隊とすることに決した。しかし、昭和十二年一月軍縮会議脱退を通告してからは、独自に整備充実につとめるようになり、やがて太平洋戦争に突入した。

横須賀海軍工廠においては、大正七（一九一七）年に第五ドックが、昭和十五（一九四〇）年五月に第六ドックが

それぞれ完成し、昭和二十（一九四五）年八月の時点で、横須賀市を中心につきのような軍用施設がもうけられていた。

横須賀鎮守府司令部（市内稲岡町）

横須賀海軍人事部、経理部、施設部、艦船部、港務部、運輸部

横須賀海軍工廠（横須賀軍港）

横須賀海軍工廠総務部、医務部、会計部、潜水艦部、造船部、造機部、造兵部、航海実験部、光学実験部、電池実験部、機関

実験部、機雷実験部

第一海軍技術廠（追浜）

横須賀海軍病院（楠ヶ浦）

野比海軍病院（野比）

横須賀海軍刑務所（大津）

横須賀海兵団（楠ヶ浦）

武山海兵団（林）

横須賀防備隊（久里浜）

横須賀警備隊（楠ヶ浦）

海軍砲術学校（〃）

海軍航海学校（〃）

大楠海軍機関学校横須賀分校（〃）

第一特攻戦隊司令部（〃）

横須賀潜水艦基地隊（長浦）

海軍砲術学校長井分校（長井）

海軍水雷学校（田浦）

海軍水雷学校久里浜分校（久里浜）

海軍通信学校（〃）

横須賀海軍工作学校（〃）

大楠海軍機関学校（林）

大楠海軍機関学校横須賀分校（楠ヶ浦）

横須賀海軍特別陸戦隊本部（衣笠）

後年、日本海軍有数の軍港となった、日本のツーロン（横須賀）も、太平洋戦争に敗北した結果、それまであった軍の施設のおおくは閉鎖、撤去、破壊される一方で、機械設備などは賠償として取り去られた。

昭和二十（一九四五）年八月三十日、横須賀にアメリカ軍の進駐がはじまると、それまで日本海軍の軍艦旗がひるがえていた横須賀軍港は、星条旗に代表されるアメリカ海軍一色に塗りつぶされた。

昭和二十六（一九五一）年十二月、横須賀にアメリカ海軍極東司令部がおかれ、翌年には保安大学校（防衛大学校の前身）が久里浜に開校し、同二十九（一九五三）年七月に海上自衛隊が発足してからは自衛艦の基地となり、自衛官の教育訓練機関として、海上自衛隊幹部学校、同術科学学校、などが設けられたが、のち江田島に移転した。戦後、横須賀は米軍駐留の基地として、また自衛隊の拡張発展とあいまって国際的な基地として再出発し、かつての兵たん基地長浦港は外国貿易と捕鯨基地となり、久里浜港は遠洋漁業の根拠地となったほか、自動車、造船などの工業もさかんになり、こんにちにいたっている。

北イタリアのジェノヴァから汽車で地中海に沿って走り、ツローン、マルセーユに寄り、ヴァランスよりオプナにおもむいたのは数年前の夏のことである。オプナには三日滞在した。

ある日の夕刻、『ル・ドーフイーヌ』紙の記者とともに、オプナ橋のちかくにあるヴェルニーの旧宅を訪ねた。ヴェルニーは母方の祖父にあたるといふ一般医のピエール・ポモン氏が、娘とむすこを伴って車でやってきた。ヴェルニーの旧宅はふだん無人であり、一族の集りがあるときのみ、扉がひらかれるという。

ポモン医師が子供たちを連れてきたのは、日本人をひとめ見せてやろうとした親心か、それとも通訳として使うためであったものか。かれは懐中電灯を手にし、玄関からわれわれを家のなかに案内すると、雨戸をあけ、外の光を屋内に入れた。玄関に銅鑼どろがつるしてある。一階に食堂があり、そこに大きなテーブルがみられる。階段をのぼり二階にゆくとき、壁ぎわに写真（幕末の横須賀、鎌倉を写したもの）、水彩画（外国とオプナの風景）などが五、六点額に入れて飾ってあった。

浮世絵も数点あったが、あまり上等なものではなかった。二階には居間兼書斎、寝室、客間などがある。

天井はとても高い。居間には家具調度類のほか、サーベル、日本刀、弓矢、ヨーロッパの短刀などが飾っており、書棚には本がぎっしりつめ込まれている。寝室はいたって簡素なもので、板の床のうえにベッドが二つあった。

客間には、先祖のリリーフや写真、ヴェルニーとその夫人の写真などが三、四点みられたほか、横須賀における胸像除幕式のような写真を写したものが多数かざられていた。

間数はたくさんあったようだが、すべて見たわけではない。ポモン医師は英語も達者であるが、そのことを娘が英語に直して説明してくれた。家の中をひとわたり見、外に出るとき、『フランソワ・レオンス・ヴェルニー』（私家

本)を一冊贈られた。

うす暗い屋内から外に出たとき、空はセピア色をしており、にわか雨が降ってきた。記者とわたしは写真を何枚か撮ったのち、ボモン親子に別れを告げ、めいめい車でオプナの町にもどった。……

いまこの稿を書きながら、そのときのことをなつかしく想いおこしている。

Acknowledgements.

My grateful thanks are due to the Archives of the Marine in Paris, the Archives of Privas, the town office at Aubena, the Historiographical Institute (the University of Tokyo) and the public library at Lyon, for permission to consult and copy relevant documents.

Thanks are also due to Dr. Pierre Pomeon, Mr. Jean Rocher and Mr. Maudin at Aubena for providing assistance during my research.

注

- (1) François-Léonce Verry, *L'imprimerie Lefrancq et C^e*, 1990.
- (2) Aubenas au XVIII^e SIÈCLE, d'après le plan dressé le 11 Novembre 1812 par le Conseiller d'Etat, Préfet de l'Ardeche: Chaillou, Copié par R. Verron (Archives Municipales).
- (3) Ministère de la Guerre, Ecole Imperiale Polytechnique. Signalement et Notes de l'Elève Verry (François-Léonce) admit dans le service [...] par décision du 6 Septembre 1858. [「フランス海軍歴史資料館文庫」]
- (4) 注(1)の三ページ。
- (5) Mission de France au Japon - Direction Politique No. 30.
仏外相宛レオン・ロッシュ書簡(一八六五・二・二八付、横浜発、マイクロフィルム)
仏外相宛レオン・ロッシュ書簡(一八六五・一・一六付、横浜発、マイクロフィルム)

- (6) Mission de France au Japon - Direction Politique No. 25.
- (7) 『横須賀市史』(横須賀市役所、昭和三十二年三月)、一七七ページ。
- (8) 村上貞次郎『お雇い外国人⑤ 建築・土木』(鹿島出版会、昭和五十一年三月)、一一五ページ。
- (9) ヴェルニーの兄マティウ・アルチュール・ヴェルニーは、一八三四年十月三十日オプナに生まれ、一八九一年四月十八日死去。一八六一年十月二日にロートンク商フレデリックの娘と結婚し、二女あり。当時、マルセーユの商人であった。(『Vitalain: La France Moderne-Dictionnaire Généalogique, Historique et Biographique-II CDrome et Ardèche』, 1908, サン・プリバ文書館蔵)、九四九ページ。
- (10) 君塚進校注「仏英行(柴田剛中日載七・八より)」(日本思想大系66『西洋見聞集』岩波書店刊所収)、二八四ページ。
- (11) 同右よりまとめたもの。
- (12) 軍艦組頭肥田浜五郎のこと。当時、機械類の買いつけのためにオランダにいた。
- (13) 肥田の属僚布施鉦吉郎のこと。
- (14) 武蔵国熊谷出身の密出国者、斎藤賢次郎のこと。モンブラン伯とともに渡仏後、同人の秘書のような仕事をしていた。
- (15) 『横須賀市史』(横須賀市役所、昭和三十二年四月)、一三二ページ。
- (16) 同右、二三二ページ。
- (17) 注(8)の一五〇一六ページ。
- (18) 沢 護「横浜・横須賀製鉄所のフランス技師」(『千葉敬愛経済大学 研究論集 第21号』所収)、一〇六ページ。
- (19) Nouvelle organisation du personnel Français de l'arsenal d'Yokoska「フランス海軍歴史資料館文書」による。
- (20) Composition du Personnel Français「フランス海軍歴史資料館文書」によると、雇フランス人たちは、大工・穴あけ・かしめ工・仕上げ工・かじ屋・金物製作人・溶鉱工・指物細工・製帆工・帳簿係・一般労働者などからなっていた。
- (21) 注(1)の一四〇ページ。
- (22) パリの海軍省および植民地省宛ヴェルニー書簡(一八六八・四・一付、横須賀発)「フランス海軍歴史資料館文書」。

- (23) 同右。
- (24) 注(15)の二三六。
- (25) 高橋邦太郎『お雇い外国人⑥軍事』（鹿島研究所出版会、昭和四十三年十二月、一〇九〜一二〇ページ）。
- (26) 注(15)の二七八ページ。
- (27) 注(1)の二五〇〜二五二ページ。
- (28) 注(1)の一四五ページ。
- (29) 注(1)の一五七ページ。
- (30) 注(15)の二八〇ページ。
- (31) 注(15)の二七九ページ。
- (32) 注(30)に同じ。
- (33) 注(1)の二七二〜二七九ページ。
- (34) 注(1)の一九四ページ。
- (35) 注(1)の一九七ページ。
- (36) 注(1)の二三五ページ。
- (37) 注(1)の二五三ページ。
- (38) 注(1)の二五〇ページ。
- (39) 注(15)の二八一ページ。以下横須賀市における日本海軍の発展については、『横須賀市史』の二四一〜二八七ページを参照した。

- Abbé Jean Charay: Aubenas en vivarais, guide historique et artistique, éditions Habauzit, Aubenas, 1951.
- Destination Aubenas, Mairie d'Aubenas, 1992.
- Paul Maurer: Histoire de Toulon. Librairie e. Montbarbon Toulon, 1943.
- Acte de naissance – Verry François Léonce, No. 86. (Mairie d'Aubenas).
- Acte de décès – Verry François Léonce, No. 49. (Mairie d'Aubenas).
- Jean Durand: Histoires et Destins Extraordinaires, Tome 1 Ardeche-Drôme.
- Jean Raoulx: Les Français au Japon. La création de L'Arsenal de Yokoska. extrait de la Revue Maritime (Mai 1939).
- Société d'éditions géographiques, maritimes et coloniales.
- Documents conservés dans les archives de la Marine, relatifs à l'arsenal de Yokoska.
- Correspondence Politique, Japon 1854-1896.
- The Japan Herald (1865. 7. 1)
- The Times (1865. 1. 4)
- Journal des Débats-Politiques et Littéraires (1865. 8. 30)
- Le Courrier de Lyon (1865. 9. 6, 12. 26)
- Le Salut Public (1865. 9. 6, 8. 31)
- The London and China Express (1866. 1. 10)
- The Japan Times (1866. 3. 16)
- 『横須賀海軍工廠史』(横須賀海軍工廠編、大正四年九月)
- 『幕末維新外交史料集成 第六卷 修好門』(財政經濟學會、昭和十九年一月)
- 『横須賀製鉄所二件』(『統通信全覽』所収、雄松堂出版、昭和六十一年)

勝海舟『海軍歴史Ⅲ』（講談社、昭和四十九年三月）

” 『勝海舟全集 13』（勁草書房、昭和四十九年四月）

「仏英行（柴田剛中日載七・八より）」（日本思想大系『西洋見聞集』所収、岩波書店、昭和四十九年十二月）

岡田拱蔵『西航小記』（写本一）

「柴田日向守 英仏行御用留」（原本一）

「横須賀製鉄所の人びと——花びらくフランス文化」（有隣堂、昭和五十八年六月）

『栗本鋤雲遺稿』（鎌倉書房、昭和十八年九月）

尾佐竹猛『幕末外交秘史考』（邦光堂書店、昭和十九年七月）

大塚武松『幕末外交史の研究』（寶文館、昭和二十七年十一月）

高橋邦太郎『お雇い外国人④ 軍事』（鹿島研究所出版会、昭和四十三年十二月）

村松貞次郎『お雇い外国人⑤ 建築・土木』（鹿島出版会、昭和五十一年三月）

武内一郎『横須賀港独案内』（明治二十一年三月）

『横須賀市史』（横須賀市史編纂委員会、昭和三十二年三月）

『横須賀百年史』（横須賀百年史編さん委員会、昭和四十年三月）

『横須賀市史』（横須賀市、昭和六十三年十二月）

『日本近世造船史』（弘道館、明治四十四年一月）

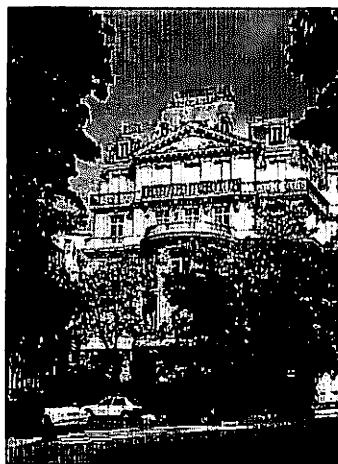
『横浜市史 第三卷 上』（横浜市、有隣堂、昭和三十六年三月）

蜷川新『小栗上野介』（千代田書院、昭和十八年八月）

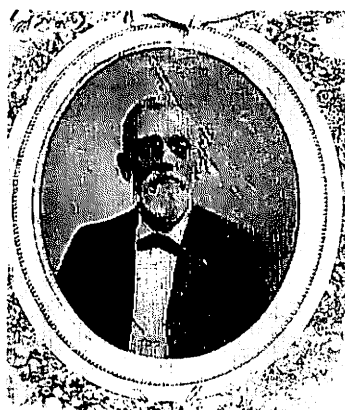
野村兼太郎『維新前後』（日本評論社、昭和十六年四月）



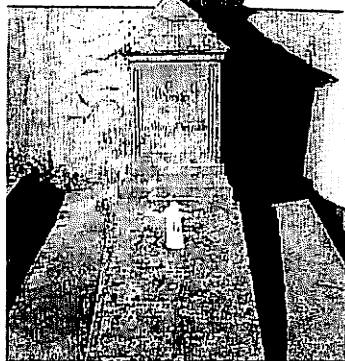
外国奉行柴田日向守 Shibata, Hiougano Kami (1823-77), Gouverneur aux affaires étrangères, Commissaire du gouvernement Japonais.



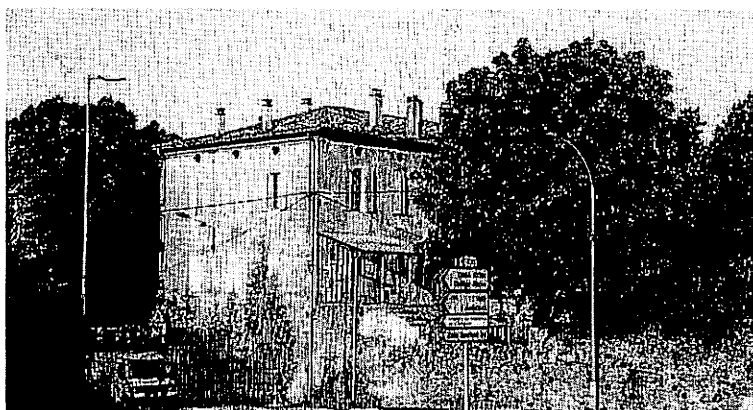
柴田日向守一行のバリにおける借家 (ジャン・グージョン街 51 番地) [筆者撮影]



フランソワ＝レオンス・ヴェルニーの肖像写真



ヴェルニーの墓 (オブナ) [筆者撮影]



ヴェルニー終えんの家（オブナ）〔筆者撮影〕



ヴェルニーの旧宅内の居間〔筆者撮影〕